

癌腫症ニ於ケル内分泌腺ノ病理 解剖學的及組織學的研究

其ノ3 甲狀腺ノ變化ニ就キテ

金澤醫科大學病理學教室(主任中村教授)

助手 石本義四郎

(昭和10年3月26日受附)

目 次

緒 論	III 實 質
研究材料及研究方法	(1) 濾胞ノ大サ, 上皮細胞及膠樣質
所 見	(2) 巨大濾胞, 結節性甲狀腺腫, 上皮 増殖及濾胞新生
考 按	(3) 「リポイド」
I 重 量	(4) 色 素
II 間 質	(5) 濾胞内出血及結晶體
(1) 結 締 織	(附) 黃疸ヲ伴ヘル例
(2) 脂肪細胞	IV 癌腫轉移
(3) 淋巴細胞集積	結 論
(4) 血 管	

緒 論

體質學的ニ癌腫症ト結核症トハ相背馳セル位置ニ立ツ事ハ屢々記載セラレタル所ナリ。内分泌腺ハ體質ニ一定ノ關係ヲ有スコシ。曩ニ我が教室ニ於テ宮田⁽⁵⁶⁾ハ結核症例甲狀腺ヲ檢索記載セリ。余ハ癌腫症例甲狀腺ヲ檢索シ、氏ノ記載並ニ標本ニ比較シ一定ノ相違ヲ認め得タリ。茲ニ之ヲ報ゼントス。

研究材料及研究方法

檢査甲狀腺ハ我が病理學教室ニ於テ剖檢ニヨリテ得タルモノニシテ年齢27歳ヨリ87歳マデノ62例ニシテ中43例ハ男性、19例ハ女性ナリ。固定ニハ5%「フォルマリン」水ヲ用キ、固定後左右兩葉ヨリ可及的各部分ニ互レル組織片ヲ取り、ソノ一部ハ「アルコール」脱水硬化、「ツェロイジン」包埋切片ヲ作り、「ヘマトキシリン」-「エオジン」、van Gieson氏染色ヲ施シ、他ノ一部ハ「ゲラチン」包埋、氷結切片トナシ、川村一矢崎⁽⁴⁰⁾ノ「スダグ III 新染色法」ヲ施シ又無染色ノママ分極光裝置顯微鏡下ニ於テ重屈折性脂肪ヲ檢セリ、此ノ際加熱冷却ニヨル重屈折性消失又ハ不變、十字像ノ現出ニ注意セリ。

對照トシテハ癌腫症以外ノ疾患例並ニ自殺等ノ例ヲトリ、更ニ宮田⁽⁵⁶⁾ノ檢索セル結核症例甲狀腺標本ト比較シ、他方先人ノ業績ヲ參照セリ。

檢 查 例 表

検査番號	剖 檢 番 號	年齢	主 ナ ル 病 理 解 剖 上 診 斷
1	1122	35	胃癌。胃小彎部淋巴腺轉移
2	1514	35	直腸膠樣癌。腸間膜淋巴腺轉移。腹膜癌腫性浸潤
3	1545	35	胃扁平硬性癌。胃小彎部淋巴腺轉移。左肋膜二次性癌。腹膜癌
4	1384	37	肝臟原發癌。肺轉移。氣管支淋巴腺轉移
5	1897	37	胃膠樣癌。後腹膜部淋巴腺。腎盂。膀胱。肺轉移
6	1497	39	直腸膠樣癌。肝臟。肺門部淋巴腺。鼠蹊部淋巴腺轉移。左肺尖小葉性乾酪性肺炎
7	1400	40	顱頂部癌。右肺下葉慢性膿瘍
8	1251	41	胃癌。右肺轉移。氣管支。肝門部。胃大彎部及後腹膜淋巴腺轉移
9	1906	42	膀胱癌。後腹膜部淋巴腺轉移。炎症ヲ伴ヘル右側水腎。全身貧血。心筋。腎及肝變性
10	1124	43	胃癌
11	1756	43	胃幽門部癌。肝臟轉移。肺臟轉移。肝門部及後腹膜部淋巴腺轉移。直腸膀胱癌轉移。胃附近及後腹膜部膿瘍
12	1758	44	膝癌。後腹膜部。肝門部。氣管支淋巴腺轉移。肺轉移。全身黃疸
13	1546	46	(臨床診斷：胃幽門部癌兼胃下垂) 手術後。氣管支炎
14	1690	47	肝臟原發癌。肝臟硬化症。氣管支。後腹膜部。胃下部淋巴腺轉移。肺肋膜下及橫膈膜轉移
15	1611	48	S字狀結腸硬性癌。大腸伸展性潰瘍。右肺陳舊結核
16	1983	48	胃膠樣癌。左頸部。膝部及後腹膜淋巴腺。甲狀腺血管周圍。兩副腎並腎轉移。吸引力肺炎。Addison 氏病?
17	1567	50	胃癌。胃上部及下部。後腹膜部及前縱膈淋巴腺並肝轉移。骨盤腔腹膜播種性癌腫
18	1668	50	胃癌兼穿孔
19	1597	52	左肺原發癌。腎臟。左鎖骨上部及腸間膜淋巴腺。十二指腸轉移
20	1563	55	(臨床診斷：胃癌) 手術後。部分的氣管支炎
21	1530	56	胃癌。肺。肋膜。腸及前縱膈。肺。氣管並肝門部淋巴腺結核
22	1693	56	胃硬性癌
23	2009	56	胃膠樣硬性癌。橫行結腸及膝部淋巴腺轉移。橫行結腸結核性潰瘍。大網淋巴腺乾酪性炎。肝臟結核。多發性化膿性腎臟炎
24	1573	56	胃腺癌。胃上部及下部。後腹膜部。前縱膈部淋巴腺並肝轉移。腹膜播種性癌腫。全身黃疸。右肺氣管支及前縱膈淋巴腺陳舊結核
25	1091	57	顱顱部及顱頂部潰瘍性癌
26	1312	57	左原發癌腫性出血性肋膜炎。左腋窩。頸部。後腹膜部淋巴腺並肝臟。腎臟轉移。右部分性纖維甲狀腺炎。部分性腦軟化
27	1562	57	胃腺癌。腸間膜。後腹膜部。胃小彎部淋巴腺並肝臟轉移。右肺陳舊結核
28	1426	58	S字狀結腸癌。結腸後部膿瘍
29	1673	58	胃潰瘍性癌。多發性肝臟轉移。胃上部及肝淋巴腺轉移。左半月狀瓣疣贅性心內膜炎
30	1618	58	胃硬性癌。胃小彎部淋巴腺轉移。右肺下葉濕性壞疽
31	1550	60	胃癌。肝臟轉移。腎臟脂肪變性
32	1735	60	手術後。肝臟續發性癌。肝門部及後腹膜部淋巴腺並兩副腎轉移。全身黃疸

33	1304	61	食道癌腫性潰瘍。左頸部淋巴腺癌。左下葉氣管支肺炎。左纖維素性漿液性肋膜炎。右肺上葉陳舊結核
34	1866	62	胃原發性圓柱上皮性腺癌。肝臟及肺肋膜下轉移。氣管支。後腹膜部。腰部淋巴腺轉移。全身黃疸。右肺石灰沈着性陳舊結核
35	1245	63	胃癌。漿液性出血性癌腫性腹膜炎。腸間膜。後腹膜部及鎖骨上部淋巴腺並右肋膜。肝臟轉移
36	1744	64	S字狀結腸腺癌。肝臟轉移。「ヂフテリー性大腸炎(伸展性潰瘍)
37	1655	65	胸腺癌。肺轉移。左纖維素漿液性化膿性肋膜炎。纖維素性漿液性心外膜炎
38	1784	67	膽囊腺癌。肝門部及後腹膜部淋巴腺及肺轉移。全身黃疸。化膿性唾液腺炎
39	1482	68	胃癌。肝臟轉移。胃大彎部淋巴腺轉移。二次性大腸癌
40	1778	70	胃腺癌。左肺轉移癌。後腹膜部並胃部淋巴腺癌。汎發性漿液性纖維素性化膿性腹膜炎
41	1604	70	胃小彎部癌。噴門部淋巴腺轉移。左肺上葉播種性細菌性結核。左肺空洞形成。右肺上下葉細菌性結核。右肺空洞形成。腸結核性潰瘍
42	2005	71	胃硬性病。腋窩。鎖骨上部及氣管支淋巴腺結核。左上葉破壞性乾酪性氣管支肺炎
43	1823	75	胃癌
44	1436	27	(臨床診斷：直腸癌)手術後。全身性貧血
45	1318	34	胃小彎部膠樣癌。腹膜播種膠樣癌。疣贅性心內膜炎。腸腹膜陳舊結核
46	1127	37	陰唇癌。鼠蹊部再發性癌。右肺尖部分性肺炎
47	1232	39	子宮頸部癌。後腹膜部淋巴腺轉移
48	1737	44	胃扁平膠樣癌。後腹膜部淋巴腺。脾。肺。卵巢及大網轉移
49	1868	46	左肺癌。左肺結核性空洞。右下葉部分性氣管支肺炎。部分性化膿性腎炎。氣管支淋巴腺結核
50	1150	47	肝臟癌。睪臟。脾臟轉移
51	1916	55	(乳腺癌)右乳腺截除後。胸骨部再發性癌。右腋窩淋巴腺並肺轉移
52	1695	56	胃硬性病。顆粒性大腸炎(癌轉移)
53	1132	57	子宮癌變化膿性炎。子宮穿孔ニヨル化膿性腹膜炎
54	1355	60	胃潰瘍性癌。肺及肝臟轉移。腸間膜。後腹膜部及鎖骨上部淋巴腺轉移
55	1576	63	胃噴門部癌。氣管支淋巴腺陳舊結核
56	1716	64	大腸癌。潰瘍性ヂフテリー性大腸炎(「アメーバ赤痢)
57	1675	66	胃癌。胃下部淋巴腺轉移。潰瘍性大腸炎
58	1225	70	胃癌。右葉甲狀腺腫。陳舊性肺結核
59	1330	74	肝臟原發癌。肝門部淋巴腺。胃。S字狀結腸轉移。全身黃疸
60	1888	80	右肺下葉癌。漿液性化膿性腦膜腦炎
61	1204	81	胃癌。肝臟轉移。心筋變性
62	1097	89	食道癌。右肺上葉纖維素性肺炎。右肺下葉部分性纖維素性肺炎

検査番號第1號ヨリ43號マデハ男性。44號以下ハ女性ナリ。序列ハ各性毎ニ年齢順ナリ。

所 見

間質

結締織 小葉間並ニ小葉内結締織ノ共ニ增生セルモノハ39例(第1, 2, 11, 21, 22, 23, 24, 25,

26, 27, 28, 29, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 45, 49, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62號)ニシテ, ソノ著シキモノハ14例(第1, 2, 22, 29, 34, 39, 40, 41, 42, 43, 52, 55, 58, 59號)ナリ。小葉間結締織ノミニ増生ノ認メラレテ小葉内結締織ニ之ヲ示サザルモノハ5例(第8, 15, 16, 46, 48號), 小葉間結締織ノ増生ナクシテ小葉内結締織ノ所々ニ増生セルモノハ1例(第19號)ナリ。一般ニ小葉間結締織ノ増生ハ著シクシテ小葉内結締織ノ増生ハ之ニ比シテハ弱シ。小葉間結締織及小葉内結締織ノ共ニ増生ヲ認メシメザルモノハ前記セルモノヲ除ケル17例ナリ。

小葉間結締織中ニ脂肪細胞ヲ認メシメタルモノハ21例(第4, 5, 7, 9, 16, 18, 24, 25, 31, 33, 34, 35, 38, 41, 44, 45, 46, 49, 51, 53, 57號)ナリ。ソノ數ノ多クシテ脂肪組織ヲ形成セル如キモノハ之ヲ認メズ。小葉間結締織ニ「リポイド」ノ沈着ヲ認メシムルモノアリ, 殊ニ高年例ニ著シ。第20, 45號ノ2例ニ於テ濾胞上皮ト壁ニ近ク存在セル結締織トノ間ニ線狀ニ「リポイド」ノ沈着セル部認メラル(結合質ニ「リポイド」ノ沈着セルモノト看做スヲ得可シ)。

小葉間及小葉内ニ多數ノ淋巴球ノ集在ヲ認メシムルモノ9例(第9, 25, 51, 54, 55, 57, 58, 59, 60號), 所ニヨリテハ瀰蔓性分布ノ傾向ヲ示スモ大部分ハ多數集積シテ大ニシテ, ソノアルモノハ周圍トノ境界可ナリニ鋭利ニシテ淋巴濾胞ヲ想起セシメ, 中胚中心ヲ認メシムルモノハ3例(第9, 51, 60號)ナリ。

第38號ニ於テハ甲状腺被膜下ニ3ケノ軟骨嶋存在シソノ周圍ニハ結締織強ク圍繞セリ。

血管ノ充盈 ハ一般ニハ弱シ, 第9, 44號ノ2例ニ於テハ全身貧血ノ著シカリシモノナリシガ甲状腺内血管充盈又甚弱シ。唯3例(第4, 12, 61號)ニ於テハ血管殊ニ靜脈及濾胞上皮下細血管ノ充盈強シ, 中1例(第12號)ニテハ全身性鬱血ヲ認メシメシモノナリ。血管又ハ淋巴管内ニ「エオジン」ニ染着セル同質性ノ物質ヲ認メタルモノハ11例(第4, 6, 7, 13, 15, 29, 30, 34, 41, 47, 60號)ナリ。8例(第1, 2, 3, 21, 22, 25, 28, 52號)ヲ除ク他ノ全例ニ於テハ血管内ニ瀰蔓性ニ「ズダンIII」ニ染着セル物質ヲ認メタリ。小動脈内壁ニソノ内被細胞ノ多少増生シテ所謂「クノスベン」ニ似タル像ヲ呈セルモノアルハ11例(第4, 6, 7, 13, 15, 29, 30, 34, 41, 47, 60號)ナリ。小動脈内膜ノ肥厚ヲ認メタルモノハ39例(第5, 6, 14, 16, 17, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 28, 29, 30, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 39, 44, 45, 46, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62號)ニシテソノ大多數ノモノニ於テハソノ部ニ「リポイド」ノ存在ヲ認メ時ニ重屈折性物質ヲモ認メタリ。重屈折性物質ハ60°C—70°Cノ加熱ニヨリテソノ重屈折性ヲ失フモノ少ク, 多クハ100°C前後ノ加熱ニヨリ始メテ重屈折性ヲ失ヒ, 冷却後十字像ヲ現出セリ。加熱ニヨリテ消失セザルモノモ存セリ。

實質

濾胞 ノ形状ハ一般ニハ圓形又ハ橢圓形ナルモ往々稍不整形ヲ呈スルモノヲ觀且大ナルモノ又ハ結節性甲状腺腫ノ傍ニ存スルモノニハ壓迫セラレタル形ヲ呈スルモノアリ。2ケ又ハ3ケノ濾胞ガ互ニ融合セシヲ思ハシムル如キ瓢形ノモノヲ認ムル事アリ。濾胞ノ大サニハ甚ダ動搖アリ。一般ニ甲状腺被膜下ニ存スルモノ及小葉ノ周邊部ニ存スルモノハ小ナリ, 又大ナル濾胞又ハ結節性甲状腺腫ノ周圍ニ小ナルモノヲ認ムル事アリ。ソノ他ノ部分ニ於テモ著シキ差違ヲ示スモノ多シ。タメニ濾胞ノ大サハ宮田⁽⁵⁶⁾ノ結核症例検査ノ記載ト切片標本トヲ参照シテ之ヲ概定スルニトマメタリ。大ナル濾胞ノ多キモノハ13例(第3, 5, 6, 8, 17, 18, 19, 20, 23, 25, 35, 42, 59號), 概シテ中等大ナルモノヨリナレルハ26例(第1, 4, 7, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 16, 21, 22, 27, 30, 31, 32, 37, 39, 40, 45, 46, 47, 48, 50, 52, 60號)ニシテソノ他ノ23例ハ一般ニ小ナリ。余ノ検査例ニ於テハ宮田ノ結核症例ニ認メ得ザル程ノ極メテ大ナル濾胞ヲ有スルモノヲ7例(第6, 16, 25, 53, 59, 62號)ニ得タリ。

上皮細胞　　ハ一般ニハ扁平ニシテ骰子形殊ニ圓柱狀ヲ呈スルモノハ少シ。一般ニハ核ハソノ上皮細胞ノ形態ニ從ヒ種々ニシテ、細胞ノ圓柱狀ヲ呈スルモノニテハソノ基部ニ位置シ、骰子形ヲ呈スルモノニテハソノ中央部ニ位シ共ニ圓形ナリ。扁平ナル上皮細胞ニテハ核ハ中央部ニ存スルモノノ形ハ細長トナリソノ長軸ハ濾胞ノ壁ニ平行シテ壓平セラレタル如キ狀ヲ呈ス。更ニ甚シク扁平細長トナル上皮細胞ニテハ恰モ内被細胞ニ於テ觀ラルル如ク核ノ部少シク内方ニ降レリ。一般ニ膠樣質ノ充盈強キモノニテハ上皮細胞ノ高徑ハ小ニシテ充盈弱キモノニテハ大ナリ。18例(第6, 14, 19, 23, 24, 25, 32, 35, 37, 42, 45, 48, 51, 55, 59, 60, 61, 62號)ニ於テハソノ膠樣質ノ充盈ト無關係ニ濾胞上皮ノ一部ニ於テ「クロマチン」ニ富メル核ヲ有セル圓柱狀細胞ガ密ニ排列セル部ヲ散在性ニ認メシムルモノアリ(上皮細胞増生)。1例(第23號)ニ於テハ壁ノ僅ニ乳嘴狀ヲ呈セル部アレド他ノ部ニテハカ、ルモノヲ認メズ。中7例(第14, 23, 25, 35, 42, 59, 60號)ニテハ上皮増生ヲ營メルノミナラズ、増生セル上皮ノ直下ニ充盈強キ細胞血管ト數ケノ短圓柱狀乃至骰子形上皮細胞ニテ被ハレタル小ナル濾胞ノ存在シ、ソノ部 Polster (Sanderson-Damberg⁽³³⁾)ヲ形成セルモノアリ。即チ濾胞ヲ新生セルモノナリ。ソノ數ハ一切片中數ケナルモノ多キモ10ケ以上ヲ認メシムルモノ、更ニ30ケヲ認メシムルモノアリ。濾胞内ニ隔壁ヲ形成シテ濾胞ノ新生ヲ營ム如キ像ヲ認メシ事ナク又顔毛上皮ヲ認メタル事ナシ。

上皮細胞内ニ「アルコール」、「エーテル」ニ不溶性ニシテ、氷結切片標本ニテハ「ズダン III」ニヨリテ染色セラルル褐色ノ色素顆粒ヲ7例(第6, 26, 45, 46, 51, 55, 57號)ヲ除ケル他ノ全例ニ認メタリ。ソノ排列ノ狀ハ圓柱狀上皮細胞ニテハ細胞體ノ内腔ニ近ク位置ヲ占メ扁平ナルモノニテハ核ノ兩側ニ位シ、骰子形ノモノニテハソノ中間型ヲ呈ス。増生セル上皮細胞及新生セル濾胞ノ上皮細胞ニテハ之ヲ缺ケリ。ソノ量の比較ハ上皮細胞ノ高徑ノ相違ニヨリ切片面ニ於ケル細胞面積ニ差違アルタメニ錯誤ヲ來ス事多カル可キモ之ヲ概定セバ余ノ検査例ノ年齢範圍ニアル宮田ノ結核症例及他ノ對照例ノモノニ比較シテ著シキ相違ヲ認メシメザルモノナリ。

全上皮細胞内ニ「ズダン III」ニヨリテ染色セラルル「リポイド」認メラル。ソノ形狀ハ一般ニハ小顆粒狀ヲ呈スルモ高年例ニ於テハ粗大トナル。ソノ細胞内分布ハ色素ト等シクソノ上皮細胞ノ圓柱狀ナルト扁平ナルト或ハ骰子形ナルトニヨリ細胞體内ノ濾胞内腔ニ近キ部、核ノ兩側ニアルカ或ハソノ中間型ヲトレリ。時ニ細胞體ノ瀾變性ニ「ズダン III」ヲトレルカ又ハ極微細顆粒狀ヲナシテ染レルモノアリ。カカルモノハ特ニ増生セル上皮細胞又ハ新生セル濾胞ノ上皮細胞ニ屢々認メラルル所ナリ。「リポイド」ノ量の比較ハ切片標本中ニ於ケル細胞體面積ノ相違アルタメニ概定ニトマルモ高年例程多ク、且對照例ニ比スルニ全例ヲ通ジテ多キ觀アリ。全例ニ於テ壁在上皮細胞ニ部分的ナル事アルモ重屈折性脂肪ヲ認メタリ。60°C—70°Cノ加熱ニヨリテ重屈折性ヲ失ヒテ冷却後十字像ヲ現出スルモノハ少シ。カカルモノヲ部分的ニ認メシムルモノハ5例(第21, 22, 32, 35, 37號)ニ過ギズ。多クハ封鎖ニ使用セル「ゲラチン」—「グリセリン」ノ沸騰スル程ノ加熱ニヨリテ始メテソノ重屈折性ヲ失ヘリ。又此ノ程度ノ加熱ニヨリテモ重屈折性ヲ失ハザルモノモ存セリ。

上皮ノ剝離ニ2アリ。即チ一ツハ剝離セル上皮細胞ノ核ノ染色性ノ壁在セルモノニ比シテ著シキ相違ナク、細胞ノ形狀ニモ殆ンド變化ヲ呈セズシテ、「リポイド」顆粒ノ大サ分布及量並ニ重屈折性脂肪ノ量ニ於テ差違ヲ呈セズ、又屢々隣接セル細胞ト連續ノマ、壁ヨリ剝離シテ膠樣質中ニ存在スルモノニシテ他ハ核ノ染色性ニ變化アリ、退行性ニシテ細胞ノ形ハ丸味ヲ帶ビ「リポイド」顆粒ハ大トナリ細胞體内ニ不規則ニ存在シソノ量多ク、重屈折性脂肪ノ含量又ソノ濾胞壁上皮細胞ニ於ケル該物質ノ含有有無及ソノ量ニ無關係ニ多クシテ濾胞内ニ個々孤在性ニ存スルモノナリ。前者ハ充盈弱キ濾胞ニ殊ニ多ク認メラルルモノニシ

テ、死後固定マデニ要セル時間長キモノ(概シテ12時間ヲ超ユルモノ)及氣温高キ季節ノモノニ多ク、死後固定マデノ時間ノ短キモノ及寒冷ノ季節ニ於ケルモノニハ少シ。是ニ由リテ觀ルニ前者ニ屬スルモノハ死後剝離ト看做シ得可シ。後者ニ屬スルモノハ全例ニ於テ認メラレ死前剝離ト看做シ得可シ。ソノ各個例間ニ多少ノ動搖ヲ示スモノアルモ全體トシテ觀ルニ對照例及結核症例ニ比シテ著シキ相違ヲ認メシメザルモノナリ。但シ兩型ノ間ニハ屢々判定ノ困難ナルモノアリタリ。

膠樣質　ハ一般ニ「エオジン」ニ紅染シ、van Gieson 氏法ニテハ帶紅黃染スルモノソノ染色度ニハ差違アリ。淡ク染色スルモノハ被膜下ニ存スル小ナル濾胞ニ於テ屢々認メラル、外、被膜ヨリ離レタル部分ニ於テ、濃紅染シ濾胞モ大ニシテ充盈強度ナルヲ思ハシムルモノノ間ニモ存在セリ。膠樣質ノ淡染スルモノ多クシテ切片標本中全濾胞ノ略半數ニ達シ又ハ是ニ近キモノヲ擧グレバ15例(第1, 4, 10, 12, 14, 26, 28, 29, 39, 49, 55, 58, 59, 61, 62號)ニ及ベリ。膠樣質ハ一般ニハ同質性ヲ示スモ、同一濾胞内ニ於テ「エオジン」ニヨル染色度ヲ異ニスル部分ヲ認メシムルモノヨリ青味ヲ帶ビテ顆粒狀又ハ塊狀ヲ呈スルモノマデ非同質性ヲ示スモノノ種々ノ段階認メラル。カカルモノハ32例(第1, 2, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 12, 13, 14, 16, 24, 25, 26, 28, 29, 30, 31, 32, 35, 36, 39, 40, 42, 43, 49, 52, 59, 60, 61, 62號)ニ於テ部分的ニ認メラレタリ。同一濾胞内ニ於テ「エオジン」及「ヘマトキシリン」ヲトル部分ヲ分チ得テカカル色素ニ對スル親和性ニ關シテ濾胞中心部ト周縁部トノ間ニ非同質性ヲ示スモノハ30例(第1, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 11, 12, 13, 14, 16, 17, 18, 21, 22, 24, 27, 29, 30, 31, 32, 34, 36, 41, 48, 49, 50, 51, 52號)ニ部分的ニ認メラレタリ。膠樣質ノ「ズダンIII」ニヨリテ染色セラルルモノハ少シ。唯散在性ニ平等又ハ不平等性ニ染色セラルルノミノモノアリ。時ニ生前ニ剝離セル上皮細胞ヨリモ大ニシテ顆粒狀ヲ呈スル「リポイド」ノ集合塊ノ存スルモノアリ。

殆ト全例ニ於テ壁ニ近ク又ハ膠樣質ノ中央部ニ1ケ乃至數ケノ空胞又ハ空隙ヲ形成セルモノ認メラル。ソノ大部分ハ固定時ニ收縮ニヨリ人工的ニ發生スルモノナル可キモ其以外空胞狀ニシテ内ニ「ヘマトキシリン」ニ染色スル「ムチン」様物ヲ容ルモノアリ。カカルモノハ20例(第4, 10, 15, 20, 23, 24, 25, 26, 28, 31, 39, 44, 45, 46, 47, 48, 50, 53, 58, 62號)ヲ除ケル他ノ42例ニ認メラレ、少數ニ認メラルモノアルモ往々切片標本中全濾胞ノ過半數ニ達スルモノアリ。

光線屈折性强ク、「エオジン」ニヨリ濃染セラルル八面體ヲナセル結晶體ハ27例(第3, 6, 8, 11, 12, 14, 16, 18, 25, 32, 34, 35, 40, 41, 43, 45, 46, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 55, 57, 59, 60號)ニ認メラレタリ。似タル形ヲナセルモノニテ稀ニ「ヘマトキシリン」ノ調ヲ帶ビテ染色セラルルモノアリ。「ズダンIII」ニヨリテ染色セラレズ、極メテ稀ニ重屈折性ヲ呈スルモノアリ。濾胞内ニ赤血球ノ存在ヲ認メタルモノハ18例(第2, 3, 6, 10, 12, 13, 14, 16, 18, 20, 23, 34, 35, 40, 48, 58, 59, 61號)ナリ。同一甲状腺内ニ結晶體及赤血球ヲ共ニ認メシムルモノハ11例ナリ。但シ同一濾胞内ニ兩者ノ共存スルモノハ甚少シ。

濾胞ノ大サ形態、膠樣質充盈度、濾胞上皮細胞ノ形態及染色性、核ノ染色性、細胞体内ノ「リポイド」及色素含量等ニ周圍ト明ニ區別シ得可キ結節狀ヲ呈セル竈ノ存スルモノ9例(第6, 14, 25, 32, 45, 58, 59, 60, 62號)即チ14.5%ニ認メラル。ソノ大ナル濾胞ヨリナルモノハ第6號及第60號ニ各3ケ、第59號ニテハ2ケ、第14, 45, 58, 62ノ各號ニテハ各1ケ認メラレ、Wegelin⁽⁹⁸⁾ノ分類ニ從ヘバ單純性大濾胞性膠樣質性結節性甲状腺腫ト認メ得可キモノニシテ著シキ乳嚢形成ヲナセルモノヲ認メズ。小ナル濾胞ヨリナルモノハ第14, 25, 32號ニテハ各1ケ、第59號ニテハ2ケ、第60號ニテハ3ケ認メラレ、Wegelinノ分類ニ從ヘバ小濾胞性實質性結節性甲状腺腫ト認メ得可キモノニシテ顯著ナル索狀又ハ管狀ヲナセルモノ

ヲ認メズ、中第59號及60號ニ於テハ各1ヶ宛著明ニ結締織ニ包圍セラレタル實質性甲状腺腫アリテ、第59號ノモノニハソノ部組織全クソノ核染色性ヲ失ヒ、細胞境界又明瞭ヲ缺キテ壞死ノ狀ヲ呈シ、第60號ノモノハ「リポイド」及重屈折性脂肪ノ沈着著シキモノナリ。

第58號ノ左葉ハ瀰蔓性甲状腺腫ノ狀ヲ示セリ。第31號ニ於テ小葉内濾胞ノ間ニ核ハ上皮細胞ノモノニ似テ細胞體ノ是ニ比シテ遙ニ大ナル淡明ナル細胞群アリ。第34號ニテハ核ノ染色質ニ富ミテ圓形乃至長橢圓形、細胞體ノ淡明ナル細胞ノ數十ヶ集リテ小ナル濾胞大トナリ僅少ナル結締織ニヨリ圍繞セラレタル細胞巢ノ數十ヶ集リテ存スル竈アリ。第25號ニ於テハカカル細胞巢ノ數ヶ宛集レルモノ散在性ニ認メラレタリ、コノ兩例ノ細胞巢ハ Ribbert⁽⁷⁹⁾ノ胎生期ノママニ遺殘セル細胞巢トシテ記載セルモノニ似タリ。

第19號ニ於テ實質内ニ細胞體ノ大ニシテ、核ノ染色質ニ富ミテ大ナル、間接核分割像ヲ認メシムル細胞巢ノ集レル竈アリ、僅ニ腔形成ノ傾向ヲ示スモノアリテ、周圍組織ニ向ツテ浸潤性發育ノ傾向ヲ呈セリ。第16號ニテハ小葉間血管ノ周圍ニ細胞體ノ大ニシテ核ノ染色質ニ富ミ間接核分割像ヲ認メシムル細胞巢存セリ。共ニ癌腫ノ轉移ナリ。

考 按

I 重量

検査例中重量計測アリシ男性33例ノ平均ハ16.9gニシテ、其ノ最高ハ31.5g、最低ハ6.7gナリ。女性7例ノ平均ハ21.2gニシテ、其ノ最高ハ31.4g、最低ハ7.6gナリ。兩性ヲ通ジテノ平均ハ17.6gナリ。但シ各例間ニ動搖甚シク而モ計測アリシモノハ少數ナリ。

本邦人成人ニ就キテ堀澤⁽²⁸⁾ハ男性26—42歳ノ間ニ於テ17.47g、43—60歳ノ間ニ於テ17.50g、61—89歳ノ間ニ於テ12.70g、女性20—33歳ノ間ニ於テ15.30g、34—54歳ノ間ニ於テ17.00g、51—91歳ノ間ニ於テ12.90gノ平均値ヲ擧ゲ、福島⁽¹⁷⁾ハ19歳以上ノ兩性ノ平均値12.63gヲ記シ、執行⁽⁸⁵⁾ハ成人男子平均23g、女子平均19.7gヲ擧ゲ、福士⁽¹⁵⁾ハ31—35歳ノ間ノ平均男性ニテハ19.04g、女性ニテハ17.50g、平均18.27gヲ記載シ、引地⁽²⁷⁾ハ20—60歳ノ間ニ於テ平均男性19.07±0.02g、女性17.61±0.03gヲ擧ゲタリ。以上諸家ノ記載ニ比スルニ男性例ニテハ福島ヲ除ケル諸家ニ比シテ稍減少セルモ女性例ニテハムシロ増加セルモノノ如シ。

高年例ニ於テ甲状腺重量ノ減少アルハ諸家ニヨリ記載セラレタリ。飢餓ニ際シテ著シキ重量減少アルハ人體例ニ於テ Oberndorfer⁽⁷⁰⁾、Krieger⁽⁴⁸⁾、Stefko⁽⁸⁰⁾ニヨリ記載セラレ、動物實驗ニテハ Jackson⁽²⁴⁾、林⁽²³⁾等ノ記載アリ。辻⁽⁹⁵⁾ハ「ビタミン」ヲ缺如セル飼料ヲ以テセル鼠ニ著シキ重量減少アルヲ述ベタリ。Wegelin⁽⁹⁸⁾ハ Kriegerノ記載ヲ引用シ腫瘍惡液質例ニ於ケル重量減少ノ飢餓ニ比シテ少キ如シト記載セリ。

II 間質

(1) 結締織

検査例ノ大多數例ニ於テ結締織ノ増生ヲ認メタリ。文獻ニ徴スルニ中村⁽⁸³⁾ハ惡性腫瘍例甲状腺ニ於テ往々間質結締織ニ増加ヲ觀ル事アルモ年齢ニ注意スルヲ要スト述べ、福士⁽¹⁵⁾ハ癌腫症例ニ於テ結締織ノ増加アルヲ記載シ、野坂⁽⁶⁹⁾亦食道癌、肺癌及腮弓癌ニ於テ間質結締織ノ著明ニ増加スルモノアルヲ認メタリ。Martini⁽⁵³⁾ハ惡性腫瘍例ニ於テ結締織増生ヲ

認メタルモ結核症ノ際ノ増生ニハ及バザルヲ記シ、鳥海⁽⁸²⁾ハ白鼠ノ實驗的癌腫症ニ於テ比較的増生ヲ認メタリ。之ニ反シde Quervain⁽⁷⁷⁾ハ結締織ノ増殖ヲ觀ズトナシKarlefors⁽⁸⁷⁾亦癌腫症例甲狀腺ト非癌腫例ノモノトノ間ニ差違ヲ認メザリシヲ記載セリ。

同ジク慢性惡液質性疾患ナル結核症ニ於テハ結締織ノ増殖ノ著シキモノアルハ諸家ニヨリテ認メラレタル所ナリ(Wegelin⁽⁹³⁾、宮田⁽⁵⁶⁾ニ詳シ)。余ノ癌腫症例ト宮田ノ結核症例トノ切片標本ヲ比較スルニ高年例ニ於テハ結締織ノ増生ニ關シ著シキ相違ヲ觀ズ。之オソラクハ年齢ニヨル増生ノ著シキタメ(Müller⁽⁵⁸⁾、Wölfler⁽¹⁰²⁾、Pillet⁽⁷⁵⁾、Ziegler⁽¹⁰³⁾、Erdheim⁽¹³⁾、Clerc⁽⁹⁾、Ewald⁽¹⁴⁾、竹内⁽⁹¹⁾、中村⁽⁶⁵⁾⁽⁶⁷⁾、福士⁽¹⁵⁾、岡室⁽⁷²⁾、Wegelin⁽⁹⁴⁾、Cooper⁽¹⁰⁾、Berberich及Fischer-Wasels⁽³⁾)ニヨルモノナル可シ。高年ナラザルモノハ假ニ50歳マデノ兩症例ヲ比較スルニ結核症例ニ間質ノ廣ク、結締織増生ノヨリ著シキモノヲ認メタリ。之兩症ノ間ニ存スル甲狀腺組織像ノ一相違ニシテ又Martiniノ記載ニ一致スル所ナリ。

(2) 脂肪細胞

間質ニ出現スル脂肪細胞ニ就キテハ學者ニヨリ記サル、出現頻度ニ相違アリ。地域的ノ差違又ハ年齢的ノ差違ヲ認メタル人アリ。全身ノ營養状態ト關係アリトナス學者アルモ、亦之ヲ否定スルモノアリ。他方腺組織ノ萎縮ト關係アリトナスモノアリ。

宮田⁽⁵⁶⁾ノ檢索ニヨルニ結核症例105例中41例即チ39.0%ニ、余ノ檢査例ニ該當スル年齢範圍ニアルモノ39例中16例即チ41.0%ニ出現セリ。余ノ癌腫症例ニテハ62例中23例即チ37.1%ニ認メラレタリ。是ニヨリテ觀レバ兩症ノ間ニ脂肪細胞出現ニ關シテハ相違ヲ認メ得ザルヲ知り得可シ。余ハ宮田ト共ニ脂肪組織ヲ形成セルモノハ之ヲ認メザリキ。

(3) 淋巴細胞集積

檢査例中9例ニ於テ小葉間及小葉内ニ淋巴細胞集積ヲ認メタリ。中3例ニ胚中心存セリ。該竈ノ出現頻度ニ關シテハSimmonds⁽⁸⁷⁾ハ健常ト認メ得可キ1000例ノ甲狀腺中5%以上ノ頻度ニ認メ、30歳以上ノ例ニテ屢々認メラル、所ニシテ男性例ニテハ3%、女性例ニテハ15%ニ出現シ年ト共ニ出現頻度高マルモ甚ダ高年ナル例ニテハ少シト記セリ。福士⁽¹⁵⁾亦略Simmondsニ一致スル成績ヲ得タリ。Hueck⁽⁸⁰⁾ハ健常成人ノ14.4%ニ之ヲ認メタリ。余ノ檢査例ニ就キテ觀ルニ14.5%ニ出現シ、性別ニ觀ルニ男性例ニテハ4.7%、女性例ニテハ36.8%ニ當レリ。Simmonds、福士ノ記載ニ比スルニ出現頻度高シ。殊ニ之ヲ宮田⁽⁵⁶⁾ノ結核症例檢査ニ比スルニ著シキ相違ヲ認ムルモノナリ。氏ハ105例中3例(2.9%)、余ノ檢査例ニ該當スル年齢範圍内ニ於テハ其ノ39例中2例(5.1%)、性別ニ觀ルニ男性22例ニハナク、女性17例中2例(11.8%)ニ認メタルノミナリ。而モ氏ノ例ニ於テハ淋巴細胞ノ集積著シカラズシテ且胚中心ヲ認メタルモノナシ。既ニSimmonds⁽⁸⁸⁾モ惡性腫瘍例ニ於ケル該竈出現數ハ該症例剖檢數ニ平行スル所ナルモ結核症例ニテハ少キヲ認メテ著シキ事ナリトナシ、Kehl⁽⁴¹⁾亦50例ノ結核症例甲狀腺ヲ檢シテ淋巴細胞集積竈ヲ見出サザリシヲ記セリ。

兩症例ノ間ニ該竈ノ出現頻度ニ相違アル理由ヲ何處ニ求ム可キカ。其ノ出現意義ニ就キテハ多ク見解ヲ異ニス。Langhans⁽⁵⁰⁾ハ惡性乳嘴性甲狀腺腫ニ該竈ヲ認メテ其ノ由來ヲ該甲狀

腺腫ト共ニ腮弓性ニ求メタリ。然レドモ Simmonds, Wegelin ニヨルニ新生兒及幼兒ニハ觀ザルモノニシテ Langhans ノ例ノ如キヲ除外セバ總テ異所ノ新生ト解ス可キナリ。然ラバ其ノ由來ヲ血管ヨリノ游出カ局所性ノ増殖ニ求メザルベカラズ。von Gierke⁽²⁰⁾ハ淋巴細胞竈ノ出現ヲ胸腺淋巴體質ニ關聯セシメ Borchardt⁽⁵⁾ハ之ヲ以テ直ニ淋巴體質ノ徵候ノ一ニ數ヘタリ。Simmonds ハ該體質者ニ特ニ著シキ淋巴細胞集積竈ヲ認メザルト、該體質者ニ非ル多クノ例ニ見出ス事及該體質ノ最顯著ニ發現スル幼年者ニ觀ザル事ヲ以テ之ニ反對セリ。von Werdt⁽⁷⁹⁾, Wegelin 亦 Simmonds ニ一致セル成績ヲ得タリ。Simmonds ハ略健常ナル甲狀腺ニ於テハ女性例ニ出現多クシテ男性例トノ比ハ4ト1トノ關係ニアリト言ヒ、Hecker⁽²⁴⁾亦カ、ル關係ヲ認メテ卵巢機能トノ關係ヲ考ヘタリ。Simmonds ハ貧血性ノモノ又脂肪過多ノモノニ多ク觀タリ。脂肪過多ハ物質代謝障礙從ツテ甲狀腺機能トノ關聯ヲ思ハシムルモノナルモ Simmonds 自身ハカ、ル例ノ大部分ニ甲狀腺組織像ニ著變ヲ觀ザルヲ記載セリ。

此ノ外惡性甲狀腺腫(Langhans, Hedinger⁽²⁵⁾, Hecker), 結核性甲狀腺腫(Ruppner, Hecker), 慢性甲狀腺炎(Hashimoto⁽²²⁾, Brünger⁽⁸⁾, Reist⁽⁸¹⁾), 反復セル炎症竈(Lubarsch⁽⁵²⁾)ニ出現アル事記載セラル。更ニ再生現象殊ニ治癒的傾向アルモノニ出現スル事及萎小セル腺組織ノ部ニ補充的ニ出現スル事モ記載セラレ、(Kocher⁽⁴⁶⁾), 結節性甲狀腺腫ニ於テ稀ニ其ノ結節中ニ、多クハ被膜直下又ハ壓迫ニヨリテ萎縮セシメラレタル腺組織中ニ認メラレタリ(Wegelin)。Simmonds ハ老人又ハ慢性惡液質者ノ萎小セル甲狀腺ニテモ然ラザルモノト出現頻度ニ差違ナキヲ述べ Wegelin ハ「クレチン」ノ高度ニ萎小セル甲狀腺ニ於テモ認メザリシヲ報ゼリ。

淋巴細胞竈ノ出現ハ Basedow 氏病甲狀腺ニ於テハ著シク高シ(Kocher)。伊藤及鈴木⁽³³⁾ハ360例中224例(62.2%), Vogel⁽⁸⁷⁾ハ73%, Simmonds ハ75%, Wegelin ハ91%ヲ擧ゲ、Troell⁽⁹⁴⁾ハ甲狀腺中毒症狀ヲ呈セル 癩癆性甲狀腺腫ニテハ90%以上ニ、同様ナル結節性甲狀腺腫ニテハ33%ニ、甲狀腺中毒症狀ナキ結節性甲狀腺腫ニテハ20%ニ、甲狀腺中毒症狀ヲ呈スル甲狀腺腫ノ兩型ヲ通ジテ60%ニ認メタリト記載セリ。カ、ル場合ニハ組織ノ萎小ハ思考セラレザル所ニシテ Simmonds, Wegelin ハ甲狀腺機能充進、從ツテ内分泌物質ノ吸收増加ニヨル反應性淋巴細胞出現ト看做セリ。Dubois⁽¹¹⁾亦 Addison 氏病ノ6例中4例ニ之ヲ認メテ副腎機能ヲ代償セントスル甲狀腺機能充進ニヨル内分泌物質吸收ノ増加ニヨルモノトナセリ。

Hedinger, von Werdt ハ沃度ヲ使用セラレタル者ニ出現多キヲ記載セリ。カ、ル場合ニハ沃度ニヨル甲狀腺機能變化ト關聯セシメ得可キカ。之ヲ要スルニ出現意義ニ關シテハ見解未ダ一定セズ。種々ナル要約下ニ該竈ノ出現スル事アルベキヲ容認スルハ最穩當ナル可シ。余ノ場合ニ觀ルニ甲狀腺組織ノ萎小ハ認メ得ルモ結核症例ニ比シテ甚シキ相違ヲ認ムルモノニハ非ルガ故ニ萎小ニヨルモノトハ解シ難シ。癌腫症ノ局所性變化ニ加ハル二次的細菌感染モアリ得可キニヨリ炎症性變化ヲモ否定シ去ル能ハザルモ、結核症例ニ於テモカ、ル要件ハ同様ニ考慮セラル可キ所ナリ。又余ノ検査セル甲狀腺組織ニハ殆ド「プラスマ細胞ヲ認メズ。余ノ癌腫症例ト宮田ノ結核症例トヲ比較シテ最モ著シキハ余ノ例ニ於テハ屢々上皮細胞増

生、濾胞新生、結節性甲状腺腫ヲ得タル事ナリ。淋巴細胞集積ヲ認メタル9例中1例ニ於テハ上皮細胞増生、3例ニ於テハ上皮細胞増生ト濾胞新生トヲ認メタリ。若シカ、ルモノヲ以テ、機能亢進ヲ表現スルモノト看做シ得ルトセバ上記甲状腺機能亢進ト淋巴細胞集積トニ關聯ヲ求ムル諸家ノ説ニ一致シテ兩症例ノ間ニ認メラル、此ノ相違ヲ理解シ得可シ。Simmonds、Wegelin ハ化學的並ニ機械的刺戟及慢性炎症性變化ガ淋巴細胞集積竈ノ出現ノ直接ノ因ヲナスト言ヘリ。氏等ニ從ヘバ癌腫症例ニ於テハ癌腫ノ破壊吸收ニヨル所謂毒素ノ影響ヲモ考慮ス可キナリ。

(4) 血管

余ノ検査例ニ於テハ血管ノ充盈ハ一般ニ弱シ。甲状腺内血管殊ニ靜脈並ニ淋巴管内ニ出現セル「エオジン」ニ染着セル同質性物質ニ就キテハ種々ナル見解ノ述ベラレタルアリ。「エオジン」ニ對スル染着性、同質性及「アルコール」固定時ノ收縮現象等ヨリ濾胞内膠様質ト同一ナリトナス學者アリ。組織化學的ニ同一物質ナルヲ確定ス可キ根據ナキ事、甲状腺動脈内ニ於テモ認メラル、事、他臟器ノ血管及淋巴管内ニテモカ、ル物質ヲ認メ得ル事、殊ニ淋巴管腫ノ内容物ニ屢々認メラル、事ヨリ之ヲ單ニ血漿又ハ淋巴漿ト看做ス學者アリ。靜脈又ハ淋巴管ヲ經テ甲状腺内分泌物ノ循環系ニ輸送セラル、ハ勿論ナルベキモ他方甲状腺内分泌物ヲ正確ニ選擇的ニ染出スル方法ノ存セザル現在ニ於テハ此ノ問題ニ對スル正シキ見解ヲ有スル能ハズ。夙ニ中村ハ血管内該物質ヲ以テ直ニ濾胞内膠様質ト同一物ト看做シ得ザルヲ述ベタリ。余ハ宮田⁽⁵⁶⁾ノ結核症例ト余ノ檢セルモノトヲ比較シテ該物質ノ出現ニ就キテハ兩症ノ間ニ著シキ相違ナキヲ確メ得タルヲ記載スルニトドム可シ。

検査例及對照例ニ於テ血管内ニ「ズダン III」ニヨリテ染色セラル、同質性ノ物質ヲ認ムル事極メテ屢々ナリ。之ヲ以テ直ニ「リベミー」トナス見解ニハ賛スル能ハズ。何故ナラバ川村-矢崎⁽⁴⁰⁾ノ新法ニヨリテハ殆ド常ニ各臟器血管内ニカ、ル物質ヲ認メ得ルガ故ナリ。

所謂「クノスペン」ノ形成ハ生理的ナルモノト看做サル (M. B. Schmidt⁽⁸⁵⁾)。余ハ之ニ似タル像ヲ 17.7%ニ於テ認メタリ。宮田ハ結核症ノ 105例中 17例即 16.2%ニ又余ノ検査例ニ該當スル年齢範圍ノモノ 39例中 7例即 15.4%ニ認メタルモノニシテ兩症ノ間ニ其ノ出現頻度ニ差違ナシ。

大多數例ニ於テ小動脈ノ硬化性變化ヲ認メタリ。一般ニ高年ニナルニ從ツテ其ノ變化ノ度強シ。カ、ル關係ハ他ノ臟器ニ於テモ屢々認メラル、所ナリ。

III 實質

(1) 濾胞大サ、上皮細胞及膠様質

悪性腫瘍殊ニ癌腫症ニ於ケル甲状腺組織像ノ記載ハ多カラズ且其ノ記サル、所亦區々タリ。Sarbach⁽⁸⁴⁾、Karlefors⁽⁸⁷⁾ハ夫々癌腫症惡液質並ニ悪性腫瘍例ニ於テ變化ヲ認メズ。中村⁽⁶³⁾ハ甲状腺ノ萎小、膠様質ノ平等ニ非ズシテ青味ヲ帶ビテ染レル顆粒狀又ハ塊狀物ヲ混ズルモノアルヲ述べ、竹内⁽⁹¹⁾ハ他ノ疾患例ト共ニ胸部ニ主病竈ヲ有スル悪性腫瘍例ニテハ他部ニ存スルモノヨリモ上皮剝離及膠様質ノ變化ヲ示スモノ多キヲ記載セリ。福士⁽¹⁵⁾ハ癌

腫症ニテハ濾胞ノ増大アルモノ62.5%, 縮小アルモノ37.5%, 上皮ハ扁平トナリ又ハ萎縮若シクハ剝離變性ニ陥ルコト極メテ多ク膠様質ノ濃度ハ低ク淡染スト言ヒ, 岡室⁽⁷²⁾ハ癌腫症例ニテハ膠様質ノ變化甚シク空胞ノ形成モ多シト記シ, 野坂⁽⁶⁹⁾ハ惡性腫瘍例ニテハ一定ノ變化ヲ認メザルモ食道癌, 肺癌及腮弓癌ニテハ濾胞ノ破壊, 濾胞内膠様質ノ染色不同, 空胞形成, 上皮剝離ノ多キ事及濾胞ノ大サ形ノ不同アリシヲ記載セリ. 實驗の方面ヲ觀ルニ鳥海⁽⁹²⁾ハ白鼠ニ Flexner 氏癌ヲ移植シテ濾胞内膠様質ノ減少シ上皮細胞ノ變化ヲナシ剝離セルモノアリ且増殖ヲ營ムモノアリシヲ言ヒ, Oike⁽⁷³⁾ハ種々ノ營養狀態下ニテ家兎ニ「テール癌ヲ發生セシメテ大多數ニ甲狀腺機能亢進ノ惹起セラレタルヲ觀, Mercier 及 Gosselin⁽⁵⁴⁾ハ鼠癌ニテハ濾胞ハ小ニシテ高キ上皮ヲ有シ膠様質ハ少シト記載セリ. 余ノ癌腫症例檢査ノ所見ハ各例間ニ著シキ相違ヲ示シタリ. 之ヲ總括セバ濾胞ノ大サハ平等ヲ缺キ, 巨大濾胞ヲ認メシムルモノ亦存ス. 上皮ノ高サハ種々ナルモ扁平ナルモノ多ク, 死前剝離ヲ認メタリ. 屢屢上皮細胞増生及濾胞新生ヲ認メ, 膠様質ノ充盈度ハ全例ヲ通ジ又ハ同一例内ニテモ種々ニシテ濃染セルモノ及淡染セルモノ混在ス. 膠様質ノ同質性ヲ缺キテ青味ヲ帶ベル顆粒狀又ハ塊狀ヲ呈スルモノ多ク, 「ヘマトキシリン」ニ染着スルモノ亦多數例ニ存セリ. 「ムチン様物ヲ容レタル空胞ヲ多數例ニ認メ, 結節性甲狀腺腫ヲ9例ニ於テ認メタリ. 甲狀腺組織像ノミヨリ其ノ機能狀態ヲ推スハ頗ル難シ. 然レドモ余ノ得タル所見ヨリ上皮細胞増生, 濾胞新生, 及結節性甲狀腺腫ヲ除ケバ他ハ結締織ノ増生ト共ニ寧ロ甲狀腺機能ノ減退ヲ思ハシムルモノト看做シテ大過ナルベシ. 而シテ部分的ニハ前記諸家ノ記述ニ一致スル所アルモノナリ.

癌腫症例甲狀腺ノ組織學的研究ニ當リテハ老人性變化及營養障礙ノ影響ヲ考慮セザルベカラズ. 老人性變化トシテ記載シアルモノ少カラズ(Wölfler⁽¹⁰²⁾, Müller⁽⁵⁹⁾, Pillet⁽⁷⁵⁾, Ziegler⁽¹⁰³⁾, Erdheim⁽¹³⁾, Clerc⁽⁸⁾, Biedl⁽⁴⁾, 竹内⁽⁹¹⁾, 中村⁽⁶⁵⁾⁽⁶⁷⁾, 福士⁽¹⁵⁾, Cooper⁽¹⁰⁾, Wegelin⁽⁹⁸⁾, Hellwig⁽²⁶⁾等). 其ノ記サル、變化ニ就キテハ必ずシモ一致セザレドモ之ヲ總括セバ濾胞ノ消失, 縮小, 大サノ不同, 上皮ノ高徑ノ減少, 種々ノ退行性變化及剝離, 膠様質ノ増加又ハ減少, 濃度ノ増加, 染色性ノ不同及非同質性並ニ空胞形成ナリ. 余モ對照トシテ選ベル老人例ニテハ濾胞ノ消失及上皮ノ高度ノ退行性變化ヲ除ケル上記ノ變化ヲ屢々認メ得タリ.

人體營養障礙例ニ就テハ記載セラレタルモノ少シ. Oberndorfer⁽⁷⁰⁾ハ甲狀腺ノ著シク萎小シテ濾胞ノ萎小, 膠様質ノ濃縮, 其ノ分泌減少ヲ示セルヲ觀, Stefko⁽⁹⁰⁾ハ甲狀腺ノ萎小シテ其ノ膠様質ノ殆ド常ニ鹽基性色素嗜好性トナリ, 末期ニハ濾胞ノ萎小アルヲ記載セリ. 動物實驗方面ニテハカハル記載ハ尠カラズ(Barbera 及 Bice⁽²⁾, Missiroli⁽⁵⁷⁾, Traina⁽⁹³⁾, Redaelli⁽⁷⁸⁾, Jackson⁽³⁴⁾, 林⁽²³⁾, Wegelin⁽⁹⁸⁾等). 其ノ擧ゲタル所ヲ概記セバ濾胞ノ萎小, 上皮ノ萎小, 他ノ退行性變化及剝離, 膠様質ノ初メノ増加, 後ノ減少及濃縮等ナリ.

茲ニ於テ癌腫症例ノ甲狀腺ニ見タル組織像ハ老人性變化及營養障礙例ノ夫ト一致セルモノ多キヲ知り得ベシ. 癌腫症例ニ於テハ之等ノ影響ノ外癌腫症ニ特有ナル變化即チ其ノ體質的特異性ニ基ケルト看做サルベキモノ及癌腫ノ所謂毒素ノ作用ニ對スル反應ヲ期待スルヲ得可

シ。此ノ點ヲ明ニスルタメニ同ジク慢性惡液質性疾患ナル結核症例ニ於ケル甲状腺ニ關スル檢索例ヲ求ムルニ記載セラレタルモノ多シ(宮田⁽⁵⁶⁾ニ詳シ)。之ヲ總括セバ上皮ノ剝離、増殖、膠樣質ノ消失又ハ強度ナル充盈ヲ示スモノ及顆粒狀ヲ呈スルモノ、空胞形成及濾胞内容ノ非同質性等ニシテ一致セザル點アリ。由來甲状腺ノ檢索ニ當リテハ考慮ス可キ條件多シ、就中地域的ノ差違ハ最モ注意ヲ要ス可キ點ナリ。故ニ當地方ニ於テ檢索セル宮田ノ結核症例中殊ニ余ノ檢査例年齢範圍ニ於ケルモノト余ノ檢査例トヲ比較ス可シ。然ラバ此ノ兩症例ノ間ニハ一定ノ相違ヲ認メ得可キナリ。即痛腫例ニ於テハ前記セル淋巴細胞集積ノ外巨大濾胞ヲ認メ得、且屢々上皮細胞増生及濾胞新生並ニ結節性甲状腺腫ヲ得タリ。カ、ルモノハ宮田ノ結核症例ニ於テハ存在セザリシカ又ハ存在セリトスルモ輕微ナリシモノナリ。

(2) 巨大濾胞、結節性甲状腺腫、上皮細胞増生及濾胞新生

檢査例中巨大濾胞又ハ囊胞ト認メ得可キモノヲ7例即11.3%ニ得タリ。此ノ成因ハ正常濾胞又ハ膠樣質性結節性甲状腺腫ノ濾胞ノ融合ニ求メ得ルモノアリ又生來性由來モ考ヘ得可シ。濾胞ノ融合ニヨリテ來ルモノハ高年例ニ於テ他ニ比シテ屢々認メ得トナサル、(Wegelin⁽⁹⁸⁾)所ナルヲ以テ余ノ得タルモノニアリテハ之ヲ融合ニヨリテ來レルモノト考ヘラレザルニアラザルモ他方宮田ノ結核症例中高年ナルモノニ就テ觀ルモ余ノ得タル如キ大ナル濾胞ヲ認メシムルモノナシ。故ニ假ニ之ヲ生來性由來ニシテ先天性ノ基礎ノ上ニ立ツモノトセバ後述スル結節性甲状腺腫ト共ニ兩症ノ間ニ存スル體質的相違ヲ理解スル一端トモナリ得可シ。

甲状腺組織内ニ結節狀ヲ呈スルモノニハ結節性甲状腺腫及結節性増生ノ二者アリ得可シ。文獻ヲ閱スルニ此ノ兩者ヲ區別シテ記載スルモノ又區別セザルモノアリ。カ、ルモノヲ總括シテ結節トシテ其ノ出現頻度ヲ觀ルニ Kloeppel⁽⁴⁵⁾, Clerc⁽⁸⁾, Ribbert⁽⁷⁹⁾, Hueck⁽⁹⁰⁾, Wegelin⁽⁹⁸⁾, Jaffé⁽³⁶⁾, Rice⁽⁸⁰⁾, Hellwig⁽²⁶⁾等ハ高キ數値ヲ記載セリ。然レドモ本竈ノ出現ニハ地域的差異ノ甚シキモノナリ。之ヲ日本人ニ就テ檢索セルモノニ觀ルニ de Oca⁽⁷¹⁾ハ70例ヲ檢シテ結節ヲ1例ニダニモ觀ズ、中村⁽⁶⁸⁾ハ金澤ニテ100例中8例ニ、引地⁽²⁷⁾ハ仙臺ニテ2921例中85例即チ2.91%ニ結節性甲状腺腫ヲ認メタリ。余ハ52例中9例即14.5%ニ於テ結節性甲状腺腫ヲ認メタリ。之ハde Oca, 中村, 引地ノ記載ニ比シテ高キ出現頻度ヲ示スモノナリ。殊ニ之ヲ105例中僅ニ1例ヲ得タル宮田⁽⁵⁶⁾ノ當地方ノ結核症檢索例ニ比較セバ著シキ相違ヲ見出スモノナリ。

結節性甲状腺腫ノ成因ニ就キテハ胎生的ニ作ラレタル基礎ノ上ニ生ズルトナス學者アリ(Wölfler⁽¹⁰²⁾, Borst⁽⁵⁾, Ribbert⁽⁷⁹⁾, Simpson⁽³⁹⁾)。其ノ一部ノモノノ成因ヲ分化程度低キ中心管上皮ニ求ムル學者アリ(Krämer⁽⁴³⁾, Troell⁽⁹⁴⁾)。又之ヲ生後ニ健常濾胞上皮ヨリ由來ストナス學者アリ(Virchow⁽⁹⁶⁾, Hitzig⁽²⁸⁾, Erdheim⁽¹³⁾, Michaud⁽⁵⁵⁾, Vogel⁽⁹⁷⁾, Hueck⁽⁹⁰⁾, Kline⁽⁴⁴⁾, Wegelin⁽⁹⁸⁾)。之等ノ見解ニ對シテ批判セントスルハ余ノ目的ニハ非ズ。唯余ハRibbert⁽⁹⁷⁾ノ記載セル如キ細胞巢ヲ示ス2例ヲ得タリ。カ、ル所見ニ對シテハ胎生芽(Ribbert), 健常濾胞上皮ヨリノ化生(Michaud), 又ハ發芽状態ニアル濾胞上皮ノ切線割及壓迫セラレタル濾胞群又ハ上皮小體ノ迷入(Hueck)等ヲ考ヘ得可ク、之等ニ對スル判斷ハ往々難シ。

余ノ2例ニ於テハ結節性甲状腺腫ノ存在ヲ認メザリシモノナリ。

結節性甲状腺腫ノ成因ヲ胎生時ヨリノ基礎ノ上ニ立ツトナスカ又ハ未分化ノマ、遺殘セル組織成分ヨリノ由來ニ導ク説ニ據レバ癌腫ノ發生ノ迷芽ニヨリテ説明シ得可キ事アルヨリ一定ノ關聯ヲ考ヘ得テ宮田⁽⁵⁶⁾ノ結核症例ニ甚ダ少キニ比シテ一定ノ體質的意義ヲ附シ得ベシ。既ニ中村ハ結節性甲状腺腫ノ成形異常又ハ之ニ關係アルモノト併セ存シタルヲ記シ木村⁽⁴²⁾亦其ノ40—55%ガ他ノ腫瘍、「ハマルトム」等ト合併セルヲ言ヘリ。

結節性甲状腺腫ト結節性増生トハ往々甚ク區別シ難シ(Hueck, Wegelin)。又カ、ル關係ハ他ノ臟器例ヘバ肝臟、攝護腺等ニモ其ノ相似ヲ求メ得可シ。余ノ結節性甲状腺腫ヲ得タル9例中1例ヲ除ケル他ノ8例ニ於テハスベテ其ノ他ノ部ニ上皮細胞増生ヲ、中7例ニテハ濾胞新生ヲ認メタリ。故ニ假ニ之ヲ結節性増生ト看做シ18例(29%)ニ得タル上皮細胞増生及中7例(11.3%)ニ得タル濾胞新生ト同義ニ解セバ之等ノ組織像ヨリ甲状腺機能充進又ハ減退セル甲状腺機能ノ部分的補充ノ2ノ場合ヲ考慮シ得可シ。余ノ得タル其ノ他ノ組織像ハ甲状腺機能ノ減退ヲ示スト看做シ得可キヲ以テ之等ノミヲ以テ機能ノ充進アリトナシ且癌腫ノ發生發育ト何等カノ相互間ノ影響アリトハ看做シ難シ。他方實驗的腫瘍研究ニ於テ屢々甲状腺機能充進ハ腫瘍ノ發育ヲ阻止シ、其ノ減退ハ發育ヲ促進スト記載セラル、所ナリ。更ニ之ヲ以テ癌腫症ニ對スル生體ノ之ヲ阻止セントスル部分的反應ト解セントセンカ、カ、ル増生ヲ示スモノ多カラザルニ鑑ミ、他ニ有力ナル根據ヲ得ルニ非ル限り之ヲ決定シ得ベカラズ。甲状腺機能減退ニ對シテ其ノ補充的ニ増生ノアリ得可キコトハ Hueck, Wegelinモ記載セル所ナリ。他方宮田ノ結核症例ヲ觀ルニ濾胞ノ新生ヲ認メシムルモノナク、上皮細胞増生ハ105例中僅ニ3例ノミニ認メラレ而モ其ノ竈ハ小ニシテ數亦少シ。且余ノ検査例ニ該當スル年齢範圍内ニテハ上皮増生ヲ認メシムルモノ1例モナシ。然レドモ其ノ他ノ組織像ニ於テハ共ニ甲状腺機能ノ低下ヲ思惟シ得可キモノニシテ其ノ間ニ著シキ差違ヲ認メ得ザルガ故ニ、余ノ癌腫症例ニ於テ部分的ニテモ機能充進ノ像アル理由ヲ單ニ機能補充ヲ以テハ説明シ去リ得ザルガ如ク思惟セラル。

要スルニ其ノ理由ハ明ニハ非ルモ癌腫症例ト結核症例トノ甲状腺組織像ニハ一定ノ相違ノ存在スルモノナルヲ肯ハシム。

(3) 「リポイド」

上皮細胞ニ出現スル「リポイド」ニ就キテ全身營養状態又ハ飢餓ノ影響ナキヲ記載セル學者アリ(人體例ニテハ Haeberli⁽²¹⁾, Arndt⁽¹⁾, 動物實驗ニテハ Traina⁽⁹³⁾, Okuneff⁽⁷⁴⁾)。中村⁽⁶⁴⁾ハ惡液質其ノ他衰弱及循環障礙ヲ來ス可キ疾患ニ於テ多キガ如シト言ヒ、福士⁽¹⁵⁾ハ種々ノ疾患例殊ニ癌腫症例ニ於テ多シト述ベタリ。余ノ癌腫症例ニテハ個々ノ例間ニ可ナリニ動搖ヲ示ス事アルモ對照例ニ比シテ多キガ如シ。該物質ハ年齢ト共ニ増加シ殊ニ高年例ニ多キヲ記載セラル(Müller⁽⁵⁹⁾, Erdheim⁽¹³⁾, Clerc⁽⁹⁾, Haeberli⁽²¹⁾, Arndt⁽¹⁾, Jaffé⁽⁸⁶⁾, 福士及江口⁽¹⁶⁾, 宮田⁽⁵⁶⁾)。余ノ検査例ニ於テモ之ニ一致セリ。

重屈折性物質殊ニ「コレステリンエステル」ニ就キテハ一般ニ稀ナリト記載セラル(Clerc,

Haerberli, Arndt, Karwicka⁽³⁸⁾, 福士及江口, 宮田). 余ノ検査例ニ於テハ重屈折性物質ハ殆ド全例ニ認メタルモ「コレステリンエステル」ナルヲ明ニスルモノハ少シ. 他ハ「コレステリン」一脂肪酸混合質其ノ他ニ屬スルモノナル可シ. 余ノ例ニテハ「フォルマリン水中ノ貯藏」ノ可ナリニ長キモノモ存スルガ故ニ之ニヨル變化モ亦考慮ニ入ルベキモノナリ.

上皮細胞内「リポイド」ノ出現ニ就キテハ見解多シ. 之ヲ大別スレバ生理的存在ト看做スモノ, 更ニ分泌機能ト一定ノ關係ヲ有スルモノト思惟スルモノ及退行性變化トナスモノノ3トナヌヲ得可シ. 余ハ若年者ニモ存スル事及増生状態ニアル若キ上皮ニテハ細小滴狀ニ彌蔓性ニ認メラル、事(カ、ル關係ハ既ニ Erdheim, Hueck⁽³⁰⁾ モ言ヘリ)及高年例ニ多キ事ヨリ一定度マデノ出現ハ生理的常在物ナランモソレ以上ノ増加ハ消耗性物質ト思惟ス.

(4) 色素

上皮細胞ニ出現スル黃褐色ノ「ズダン III」ニ染着シ、「アルコール」, 「エーテル」ニ不溶性ナル色素顆粒認メラレタリ. 中村⁽⁶⁸⁾ ハ之ヲ「リポフスチン」ト看做セリ.

本物質ノ高年例ニ出現多キハ認メラレタル所ニシテ福士⁽¹⁵⁾ ハ他ノ疾患例ト共ニ癌腫症例ニ其ノ出現増加アルヲ記載セリ. 余ハ殆ド全例ニ於テ本物質ヲ認メタルモ對照例及宮田ノ結核症例中余ノ検査例ノ年齢範圍内ニアルモノト比較シテ著シキ相違ヲ認メザリキ.

(5) 濾胞内出血及結晶體

「エオジン」ニ染着シ光線屈折性ノ強キ八面體ヲナセル結晶體ノ存在ハ既ニ屢々記載セラレタリ. 余ノ検査例ニテモ可ナリニ屢々認メラレ、宮田ノ結核症例ニ比シテ濾胞内出血ト共ニ其ノ頻度高シ. 然レドモ此ノ結晶體ノ由來、組成ノ明ニ非ルガ故ニ其ノ出現頻度ノ相違ヲ説明シ得ズ. Clerc⁽⁹⁾ ハ結晶體ノ存スル甲状腺ニテハ其ノ他ニハ著變ヲ觀ザリシヲ記載シ Isenschmidt⁽³²⁾ ハ濾胞内少量出血ハ規則的生理的ナルヲ記セリ.

福士⁽¹⁵⁾ ハ濾胞内出血ニ伴ヒテ結晶體ノ出現アルヲ言ヘルモ余ハ宮田⁽⁵⁶⁾ ト共ニ兩者ノ同一例ニ一致シテ出現スルモノモ認メタルモ、又一一致セザル場合モ認メタリ.

(附) 黃疸ヲ伴ヘル例

Lindermann⁽⁵¹⁾ ハ癌腫症及肉腫症例ニ於テ黃疸ヲ發生セルモノニ濾胞内及淋巴管内膠樣質ノ増加等甲状腺機能亢進ノ像ヲ得タリト稱シ、Müller⁽⁵⁹⁾ ハ犬及猫ノ輸膽管ヲ結紮シテ實驗的ニ黃疸ヲ發生セシメ甲状腺ノ肥大、淋巴管内膠樣質ノ増加、膠樣質増加ノタメ一見膠樣質性甲状腺腫ノ觀アル像ヲ得タリ. 但シ氏ハ犬ニテハ膠樣質性甲状腺腫ノ輕度ナルモノハ稀ニハ非ルヲ願慮セリ. Hürthl⁽³¹⁾ ハ犬ニテ同様ニ機能増進ノ像ヲ得タリトナシ、Galleoti⁽¹⁸⁾ ハ龜ノ腹腔内ニ膽汁酸ヲ入レテ膠樣質分泌増加ヲ結果シ得タリ. 之ニ反シ Bozzi⁽⁷⁾ ハ犬ヲ用ヒテ Hürthlニ追試シテ成功セザリキ.

余ハ6例(第12, 24, 32, 34, 38, 59號)ニ於テ全身黃疸ヲ示セルモノヲ得タルモ中2例ニテハ膠樣質ノ充盈ハ少キモノニシテ他ノ4例ニテモ他ニ比シテ著シク多シトハ言フベカラズ. 血管及淋巴管内ニ於テ「エオジン」ニ染着シ同質性ナル物質ヲ容レタルモノ2例ヲ得タルモ之ヲ以テ直ニ濾胞内膠樣質ト同一視シ能ハザルハ前述セル所ナリ. 余ノ所見ハ諸家ノ記述

ト一致セザルモ夫レニ向ツテハ黃疸ノ發生ノ相違及所見ノ解釋ノ相違モ顧慮シ得可ク且諸家ノ検査例及余ノ得タル黃疸例共ニ少キタメニ尙多數例ノ觀察ノ行ハル、ニアラザレバ決定シ能ハザル所ナリ。

IV 癌腫轉移

悪性腫瘍ノ甲状腺轉移ハ多キモノニハ非ズ (Ehrhardt⁽¹²⁾, 中村⁽⁶³⁾, Kaufmann⁽⁸⁰⁾). 文獻ニ徴スルニ癌腫ノ轉移ヲ記載セルモノアリ (Müller⁽⁶⁰⁾, Ehrhardt, Nägeli⁽⁶²⁾, Mori⁽⁵⁸⁾, Kitain⁽⁴⁸⁾, Giegler⁽¹⁸⁾, Wegelin⁽⁸⁸⁾, Kaufmann, Willis⁽¹⁰⁰⁾, Winkler⁽¹⁰¹⁾, Prates⁽⁷⁶⁾, 長與⁽⁶¹⁾, Kraft⁽⁴⁷⁾等).

其ノ頻度ヲ觀ルニ Müller ハ悪性腫瘍521例ヲ檢シテ其ノ1.5%ニ, Kitain ハ452例ヲ檢シテ其ノ3.1%ニ, Prates ハ175例ヲ檢シテ其ノ5例(2.9%)ニ, 長與ハ767例中肉眼的ニ認メラレタルモノヲ其ノ3例(0.4%)ニ, Kraft ハ肺癌ノ150例中1例(0.6%)ニ轉移ヲ見出セリ. 余ハ62例ヲ檢シテ其ノ2例(3.2%)ニ顯微鏡的ニハジメテ認メ得ル程ノ小ナル轉移竈ヲ認メタリ. 其ノ1例ハ胃癌, 他ノ1例ハ肺癌例ナリ. Wegelin, Willis ニヨルニ他ニ比シテ肺癌ハ甲状腺ニ轉移スル率高キモノナリ.

轉移ノ位置ニ就キテ Wegelin ハ大多數例ニ於テ正常甲状腺組織ニ非ズシテ結節性腺腫部ナルヲ言ヒ, Willis 亦結締織増生部, 石灰化竈, 腺腫様増生部又ハ其ノ他ノ異常部ニ發生スル事多キヲ記セリ. 余ノ2例ハカ、ル部ニ非ズシテ略正常ト認メ得可キ部ニ發生セルモノナリ. 但シ該兩例ニテハ其ノ他ニ氏等ノ記載セル如キ異常ヲ認メシメザリシモノナリ.

轉移セル癌腫ノ甲状腺中毒症狀 (Mori) 又ハ甲状腺機能低下 (Winkler) ヲナス事記載セラレタルモ極メテ稀ナリ. 余ノ例ニ於テハ其ノ轉移竈甚小ニシテカ、ル症狀ヲ惹起スル因ヲナシ得可シトハ思惟セラレズ.

結 論

1. 本篇ハ年齢27歳ヨリ89歳ニ至ル62例(中男性43例, 女性19例)ノ人體癌腫症例甲状腺ノ病理解剖學的及組織學的研究ノ記載ナリ.
2. 甲状腺重量ニハ著シキ變化ヲ來サズ.
3. 小葉間及小葉内結締織ハ大多數例ニ於テ増生セリ. 高年ナラザルモノニテハ宮田ノ結核症例ノ該當年齡例ニ比較シテ其ノ増生輕度ナリ.
4. 結締織内脂肪細胞ノ出現ハ21例(33.9%)ニ認メラレタリ.
5. 淋巴細胞ノ集積セルモノヲ9例(14.5%), 中3例ニ胚中心ヲ認メタリ.
6. 血管ノ充盈ハ一般ニハ弱シ. 多數例, 殊ニ高年例ニ於テ小動脈ニ硬化性變化ヲ認メタリ.
7. 濾胞ノ大サハ不平等ナリ. 7例ニ巨大濾胞ヲ認メタリ.
8. 膠様質ノ充盈ハ種々ナリ. 其ノ同質性ヲ缺キテ顆粒狀又ハ塊狀ヲ呈スルモノ過半数ニ認メラレ, 「ヘマトキシリン」ニ染色スルモノ亦半数例ニ迫レリ.

9. 「ムチン」様物ヲ容レタル空胞ヲ大多數例ニ認メタリ。
10. 膠様質内ニ赤血球ヲ認メシムルモノ18例, 結晶體ヲ認メシムルモノ27例, 其ノ同一甲狀腺内ニ併存セルモノ11例ナリ。
11. 黃疸ヲ合併セル6例ニテモ 膠様質ニ關シテハ然ラザル例ニ比シテ一定ノ相違ヲ認メズ。
12. 濾胞上皮細胞ニハ扁平ナルモノ多キモ, 18例(29%)ニ其ノ増生ヲ, 7例(11.3%)ニ濾胞新生ヲ認メタリ。
13. 上皮細胞ニ出現スル「リポイド」ノ量ハ増加セルモノノ如シ。全例ニ於テ重屈折性脂質ヲ認メタルモ「コレステリンエステル」ト認メ得可キモノハ少シ。
14. 殆ド全例ニ於テ上皮細胞内ニ色素顆粒ヲ認メタリ。他ノ症例ニ比シテ著シキ相違ヲ示サズ。
15. 9例(14.5%)ニ結節性甲狀腺腫ヲ認メタリ。
16. 宮田ノ結核症例甲狀腺檢索ニ比シテ著シキ相違ハ癌腫症例ニテハ前者ニ認メザリシ程度ノ巨大濾胞及濾胞新生ヲ認メ, 更ニ氏ノ例ニ比シテヨリ屢々淋巴細胞集積, 上皮細胞ノ増生及結節性甲狀腺腫ヲ認メタル事ナリ。
17. 2例ニ於テ略健康ナル組織内ニ極メテ小ナル轉移性癌腫竈ヲ認メタリ。

引用書目

- 1) **Arndt**, Ueber die morphologisch nachweisbaren Lipoiden in Epithelkörperchen und Schilddrüse des Menschen. Beitr. z. path. Anat. Bd. 72, 1924, S. 517. — 2) **Barbéra e Bicci**, zit. nach Wegelin (98). — 3) **Berberich u. Fischer-Wasels**, Schilddrüse und innere Sekretion. Hirsch, Handbuch der inneren Sekretion, Bd. 1, 1932. — 4) **Biedl**, Innere Sekretion, 1. Teil, 2. Aufl. 1913. — 5) **Borchardt**, Ueber das Blutbild bei Erkrankungen der Drüsen mit innerer Sekretion und seine Beziehung zum Status thymicolymphaticus. Arch. f. kli. Med. Bd. 106, 1912, S. 182. — 6) **Borst**, Die Lehre von den Geschwulsten. 1902. — 7) **Bozzi**, 野坂 (69)ニ據ル。 — 8) **Brünger**, Operationstod bei Thyreoiditis chronica. (Gleichzeitig ein Beitrag zu den Beziehungen zwischen Basedowschen Erkrankung und Thyreoiditis). Mitt. Grgeb. Med. u. Chir. Bd. 28, 1914, S. 213. — 9) **Clerc**, Die Schilddrüse im hohen Alter von 50. Lebensjahr an aus der norddeutschen Ebene und Küstengegend sowie aus Bern. Frankf. Zschr. f. Path. Bd. 10, 1912, S. 1. — 10) **Cooper**, The histology of the more important human endocrine organs at various age. Oxford medical publications, 1925. — 11) **Dubois**, Ueber das Vorkommen lymphatischen Herde in der Schilddrüse bei Morbus Addisonii. Berl. Kli. Wschr. 1919, S. 1178. — 12) **Ehrhardt**, Zur Anatomie und Klinik der Struma maligna. Beitr. z. Kli. Chir. Bd. 35, 1902, S. 343. — 13) **Erdheim**, Zur normalen und pathologischen Histologie der Gl. thyroidea, Parathyroidea und Hypophysis. Beitr. z. path. Anat. Bd. 33, 1903, S. 158. — 14) **Ewald**, zit. nach Clerc (9). — 15) **福士政一**, 甲狀腺ノ病理解剖學の方面。日本病理學會會誌 14卷, 大正13年, 3頁。 — 16) **福士政一**及

- 江口勝四郎**, 甲状腺ノ退行變性ト諸疾患トノ關係(第2報告). 日本病理學會會誌 13卷, 大正12年, 506頁. — 17) **福島東作**, 本邦成人甲状腺ノ沃度含有量ニ就テ. 日本內科學雜誌 9卷, 大正10年, 320頁. — 18) **Galleoti**, Beitrag zur Kenntnis der Sekretionserscheinungen in den Epithelien der Schilddrüse. Arch. f. mikrosk. Anat. Bd. 48, 1897, S. 305. — 19) **Giegler**, Ein Beitrag zu dem gleichzeitigen Vorkommen von Karzinom und progredienter Phthise der Lunge. Dtsch. Arch. f. kli. Med. Bd. 144, 1924, S. 223. — 20) **Gierke**, zit. nach Simmonds (88). — 21) **Haerberli**, Ueber die morphologisch nachweisbaren Fettsubstanzen und die Oxydasereaktion in der menschlichen Thyreoidea. Virchows Arch. Bd. 221, 1916, S. 333. — 22) **Hashimoto**, Zur Kenntnis der lymphomatösen Veränderungen der Schilddrüse. (Struma lymphomatosa). Arch. f. kli. Chir. Bd. 97, 1912, S. 219. — 23) **林夏村**, 饑餓ニ因ル臟器ノ變化ニ就テ. 部分的榮養障礙ニ關スル實驗的研究, 第2篇, 其ノ2. 京都醫學雜誌 第21卷, 大正13年, 1206頁. — 24) **Hecker**, Ueber das Vorkommen von lymphadenoidem Gewebe in der normalen und strumös veränderten Schilddrüse. Frankf. Zschr. f. Path. Bd. 28, 1922, S. 96. — 25) **Hedinger**, Zur Lehre der Struma sarkomatosa. I. Die Blutgefässendotheliom der Struma. Frankf. Zschr. f. Path. Bd. 3, 1901, S. 487. — 26) **Hellwig**, Die Lebenskurve der nordamerikanischen Schilddrüse. Endokrinologie Bd. 12, 1933, S. 323. — 27) **引地義男**, 日本人甲状腺重量ニ關スル統計. 東北醫學雜誌 16卷, 昭和8年, 87頁. — 28) **Hitzig**, Beiträge zur Histologie und Histogenese der Struma. Arch. f. kli. Chir. Bd. 48, 1894, S. 464. — 29) **堀澤治吉**, 甲状腺ニ關スル研究. 殊ニ重量的關係ニ就テ. 日本病理學會會誌 9卷, 大正8年, 115頁. — 30) **Hueck**, Ein Beitrag zur Beurteilung der Knoten in der Schilddrüse. Dtsch. Zschr. f. Chir. Bd. 174, 1922, S. 185. — 31) **Hürthl**, Beiträge zur Kenntnis des Sekretionsvorganges in der Schilddrüse. Pflüg. Arch. Bd. 56, 1894, S. 1. — 32) **Isenschmidt**, Zur Kenntnis der menschlichen Schilddrüse in Kindesalter. Frankf. Zschr. f. Path. Bd. 5, 1910, S. 205. — 33) **伊藤尹及鈴木格**, 甲状腺腫ノ病理學的研究, 1. 最近2年間ニ經驗セル Basedow氏病手術例ニ就テ. 日本病理學會會誌 24卷, 昭和9年, 436頁. — 34) **Jackson**, Effect of innanition upon the structure of the thyroid and parathyroid glands of the albino rat. Amer. J. of Anat. vol. 19, 1916, p. 305. — 35) **Jaffé**, Fat contents of pathologic thyroids in man: Histologic studies. Arch. of path. vol. 5, 1928, p. 13. — 36) **Jaffé**, The variation in weight of the thyroid gland and the frequency of its abnormal enlargement in the region of Chicago. Arch. of path. vol. 10, 1930, p. 887. — 37) **Karlefors**, Ueber Hypophyse und Thyreoidea bei Krebskranken. Zschr. f. Krebsforsch. Bd. 17, 1920, S. 195. — 38) **Karwicka**, Ueber das physikalische Verhalten und das physiologische Vorkommen der doppeltbrechenden Lipoiden. Beitr. z. path. Anat. Bd. 50, 1911, S. 437. — 39) **Kaufmann**, Lehrbuch der speziellen pathologischen Anatomie. 9. u. 10. Aufl. 1931. — 40) **川村麟也及矢崎俊明**, 脂肪染色ノ一新法ニ就テ. 日本病理學會會誌 23卷, 昭和8年, 215頁. — 41) **Kehl**, Anatomische Untersuchungen an Schilddrüse von Phthisikern. Virchows Arch. Bd. 216, 1914, S. 386. — 42) **木村男也**, 福士政一ノ演說ニ對スル附議. 日本病理學會會誌 14卷, 大正13年, 94頁. — 43) **Kitain**, Zur Kenntnis der Häufigkeit und der Lokalisation von Krebsmetastasen mit besonderer Berücksichtigung ihres histologischen Baus. Virchows Arch. Bd. 238, 1922, S. 289. — 44) **Kline**, The origin of adenomatous goitre. Amer.

- J. of Path. vol. 1, 1925, p. 235. — 45) **Kloeppe**, Vergleichende Untersuchungen über Gebirgsland und Tiefenlandschilddrüsen. Beitr. z. path. Anat. Bd. 49, 1910, S. 579. — 46) **Kocher**, Ergebnisse histologischer und chemischer Untersuchungen von Basedowfällen. Arch. f. kli. Chir. Bd. 92, 1910, S. 442. — 47) **Kraft**, Pathologische Anatomie und Histologie des primären Lungenkrebses. Zschr. f. Krebsforsch. Bd. 41, 1934, S. 51. — 48) **Krämer**, zit. nach Wegelin (98). — 49) **Krieger**, zit. nach Wegelin (98). — 50) **Langhans**, Ueber die epithelialen Formen der malignen Struma. Virchows Arch. Bd. 189, 1907, S. 69. — 51) **Lindermann**, Ueber das Verhalten der Schilddrüse beim Icterus. Virchows Arch. Bd. 149, 1897, S. 202. — 52) **Lubarsch**, zit. nach Simmonds (88). — 53) **Martini**, zit. nach Wegelin (98). — 54) **Mercier et Gosselin**, Ref. Zbl. f. Path. Bd. 61, 1934, S. 139. — 55) **Michaud**, Die Histogenese der Struma nodosa. Virchows Arch. Bd. 186, 1906, S. 422. — 56) **宮田榮**, 結核ニ於ケル内分泌腺ノ病理解剖學的及組織學的研究. 其ノ3. 甲狀腺ノ變化ニ就キテ. 金澤醫科大學十全會雜誌 35卷, 昭和5年, 1267頁. — 57) **Missiroli**, zit. nach Wegelin (98). — 58) **Mori**, Auftreten thyreotoxischer Symptome bei Geschwulstmetastasen in der Schilddrüse. Frankf. Zschr. f. Path. Bd. 12, 1913, S. 2.— 59) **Müller**, Beiträge zur Histologie der normalen und erkrankten Schilddrüse. Beitr. z. path. Anat. Bd. 19, 1886, S. 127. — 60) **Müller**, zit. nach Willis (100). — 61) **長與又郎**, 日本ニ於ケル癌腫ノ統計的研究. 癌 特別號, 昭和8年. — 62) **Nägeli**, Metastasen eines Rektumkarzinoms in einem Schilddrüsenadenom. Zbl. f. Path. Bd. 23, 1912, S. 290. — 63) **中村八太郎**, 内分泌ノ病理學的方面ニ關スル報告. 日本病理學會會誌 6卷, 大正5年, 3頁. — 64) 同人, 内分泌ニ關スル一, 二補遺. 日本病理學會會誌 7卷, 大正6年, 121頁. — 65) 同人, 内分泌病理ニ關スル研究追加(第二). 日本病理學會會誌 9卷, 大正8年, 90頁. — 66) 同人, 内分泌病理ニ關スル研究追加(第六), 殊ニ一, 二疾患ニ於ケル内分泌腺所見. 日本病理學會會誌 13卷, 大正12年, 498頁. — 67) 同人, 内分泌病理ニ關スル研究(殊ニ甲狀腺ノ間質ニ注意ス). 日本病理學會會誌 14卷, 大正13年, 120頁. — 68) 同人, 福土政一ノ演說ニ對スル附議. 日本病理學會會誌 14卷, 大正13年, 94頁. — 69) **野坂綱定**, 諸種疾患ニ於ケル甲狀腺ノ化學的及ビ病理組織學的變化ニ就テ. 内分泌學雜誌 2卷, 大正15年, 18頁. — 70) **Oberndorfer**, Diskussion über die Oedemkrankheit. Münch. med. Wschr. Jg. 66, 1919, S. 196. — 71) **de Oca**, Das histologische Bild der japanischen Schilddrüse als Norm. Beitr. z. path. Anat. Bd. 89, 1930, S. 333. — 72) **岡室徳之助**, 甲狀腺膠樣質内ニ於ケル空胞形成ニ就テ. 日本病理學會會誌 14卷, 大正13年, 116頁. — 73) **Oike**, Relation between tar cancer and nutrition, with special reference to morphological changes of the endocrine glands and principal visceral organs. Japan. J. of obstetric. a. gynec. vol. 14, 1931, p. 421. — 74) **Okuneff**, Zur Morphologie der lipoiden Substanzen im Hungerzustände. Beitr. z. path. Anat. Bd. 71, 1923, S. 99. — 75) **Pillet**, zit. nach Clerc (9). — 76) **Prates**, Adipositas mancher Krebskranker nebst Bemerkung über die Beziehung zwischen innersekretorischem System und Carzinom. Zschr. f. Krebsforsch. Bd. 40, 1933, S. 71. — 77) **de Quervain**, zit. nach Wegelin (98). — 78) **Redaelli**, zit. nach Wegelin (98). — 79) **Ribbert**, Das Adenom der Schilddrüse. Frankf. Zschr. f. Path. Bd. 18, 1915, S. 55. — 80) **Rice**, zit. nach Hellwig (26). — 81) **Reist**, Ueber die chronische Thyreoiditis. Frankf. Zschr. f. Path. Bd. 28, 1922, S.

141. — 82) **Ruppner**, Ueber tuberkulöse Strumen. Frankf. Zschr. f. Path. Bd. 2, 1909, S. 513. — 83) **Sanderson-Damberg**, Die Schilddrüse vom 15. bis 25. Lebensjahr. Frankf. Zschr. f. Path. Bd. 6, 1911, S. 312. — 84) **Sarbach**, Das Verhalten der Schilddrüse bei Infektionen und Intoxikationen. Mitt. Grgeb. Med. u. Chir. Bd. 15, 1906, S. 213. — 85) **Schmidt**, Ueber Zellknospen in den Arterien der Schilddrüse. Virchows Arch. Bd. 137, 1894, S. 330. — 86) **執行作彌**, 甲状腺ノ形態ニ關スル研究. 福岡醫科大學雜誌 17卷, 大正13年, 48頁. — 87) **Simmonds**, Ueber die anatomischen Befunde bei Morbus Basedowii. Dtsch. m. W. 1911, S. 2164. — 88) **Simmonds**, Ueber lymphatische Herde in der Schilddrüse. Virchows Arch. Bd. 211, 1913, S. 73. — 89) **Simpson**, Pathology of goitre. Surg. gyn. a. obstet. vol. 28, 1919, p. 153. — 90) **Stefko**, Studien über die Paravariation bei Menschen unter Einfluss der Unterernährung. Erg. d. allg. Path. Jg. 22, 1927, S. 687. — 91) **竹内清**, 諸種疾患甲状腺組織の所見比較研究. 日本病理學會會誌 9卷, 大正8年, 120頁. — 92) **鳥海照雄**, 白鼠ニ於ケル癌腫ノ内分泌臟器並ニ生殖腺ニ及ボス影響ニ就テ. 癌 19卷, 大正14年, 165頁. — 93) **Traina**, Ueber das Verhalten des Fettes und der Zellgranula bei chronischen Marasmus und akuten Hungerzuständen. Beitr. z. path. Anat. Bd. 35, 1904, S. 1. — 94) **Troell**, Ueber den Bau der Struma, mit besonderer Berücksichtigung des Morbus Basedowii. Arch. f. kli. Chir. Bd. 124, 1923, S. 700. — 95) **辻寛治**, 甲状腺ノ機能ニ關スル知見補遺. 殊ニ該機能ト食物トノ關係ニ就テ. 辻内科教室甲状腺論文集 1卷, 大正13年, 20頁. — 96) **Virchow**, Die Krankhaften Geschwülsten. Berlin, 1865. — 97) **Vogel**, Beitrag zur pathologischen Histologie der Schilddrüse. Virchows Arch. Bd. 217, 1914, S. 204. — 98) **Wegelin**, Schilddrüse. Henke u. Lubarsch, Handbuch d. spez. path. Anatom. u. Histologie. Bd. 8, Drüsen mit innerer Sekretion, 1926. — 99) **Werdt v.**, Ueber Lymphfollikelbildung in Strumen. Frankf. Zschr. f. Path. Bd. 8, 1911, S. 401. — 100) **Willis**, Metastatic tumours in the thyroid gland. Amer. j. path. vol. 7, 1931, p. 187. — 101) **Winkler**, Ueber Hypothyreoidismus bei metastatischen Carcinom der Schilddrüse. Zschr. f. kli. Med. Bd. 120, 1932, S. 400. — 102) **Wölfler**, Ueber die Entwicklung und den Bau des Kropfes. Arch. f. kli. Chir. Bd. 29, 1883, S. 1. — 103) **Ziegler**, Lehrbuch der allgemeinen Pathologie und der pathologischen Anatomie. Jena, 11. Auflage, 1906.